

## 平成27年度 学力向上アクションプラン

### 1. 学校の状況と地域の実態

- (1) 児童にあいさつ、お手伝いなど基本的な生活習慣を身につけさせ、家庭でのしつけや家庭学習を学校と家庭とで協力し合いながら、一人ひとりの実態に合わせて行うことが課題である。
- (2) 配慮を要する児童が多くなってきている状況から、児童指導を中心とした組織的な対応と児童理解・支援が必要である。
- (3) 地域は学校に協力的で、地域ボランティアの活動はさかんである。さらに学力向上に向けて学校と地域との協力体制を積極的に進め、地域住民全体で子どもを育て守る意識を高めていきたい。
- (4) 教員は授業改善に向けて意欲をもって取り組んでいる。経験の浅い教員については、一層基礎的な指導技術を身に付ける必要がある。研修したことを実践に活かせる実のある研究を行っていくようにしたい。

### 2. 今後3年間の方向（中期学校経営方針）

#### (1) 最優先課題

- 児童支援委員会<チームさが丘>を中心に、児童の基本的な生活習慣・規範意識の向上を目指した受容的・共感的な支援と指導をきめ細かく行うこと  
⇒児童支援専任教諭を配置し、個別支援の必要な児童やそうした状況に即対応し、保護者の要望に応えたり話し合ったりすることができるようにしている。また、課題を抱えている児童へはチームとして対応するようにしている。
- 児童が興味・関心をもって主体的に学び、活用力を身につける授業づくりと教員の授業力向上  
⇒メンターチームの研究充実を図る。研究授業はより内容が深まるように学年でチームとなって研究を進め、教材研究を充実させていく。
- 特別な教育的支援が必要な児童に対する学習支援の強化と、サポート体制の整備  
⇒個々に対する支援を強化する。その際 担任だけでなく、学年で協力して特別支援の必要な児童の指導にあたることのできるよう、アセスメントを共同で作成し、児童支援専任教諭や学校カウンセラーとともに支援ができるようにする。
- 会議等の精選による研究・研修時間の確保  
⇒朝の打ち合わせを火曜、金曜の放課後に設けた。会議は合理的に進めることができるよう事前の資料配布や連絡をしている。

#### (2) 学力向上に関する指導の目標・方針（平成27年度末の姿）

- 子どもが自分の思いや考えを意欲的に表現できるように、言語活動を積極的に取り入れながら授業を進めています。
- 基礎基本を確実に身につけ自力解決の力を高められるように、学年間のつながり（系統性）を意識した授業ができる指導技術を教員が身につけ、学年共通の意識をもって指導にあたっています。
- 研究・研修の充実により、指導に必要な知識・技能の向上が図られ、質の高い授業を展開しています。

### 3. 横浜市学力状況調査等からの平成26年度の実態把握

#### (1) 学力の概要と要因の分析

学力においては、学年によって差が見られるが、横浜市の平均を上回っている学年は、学習意識や生活意識においても高い。また、横浜市の平均と比べて差があるというわけではないが、授業中に自分の考えを発表しないという回答が、特に高学年で多く見られた。言語活動への支援を充実させる手立てを講じる必要がある。

#### (2) 教科学習の状況

○国語科：学年によって差が見られるが、書いたりまとめたりする力は、市の平均よりも高くなっている。しかし、話したり聞いたりする力には課題がある。

○算数科：ほとんどの学年で、「知識・理解」の項目では市の平均を上回る力がついている。「数学的な考え方」の項目も、平均または少し上回っている。

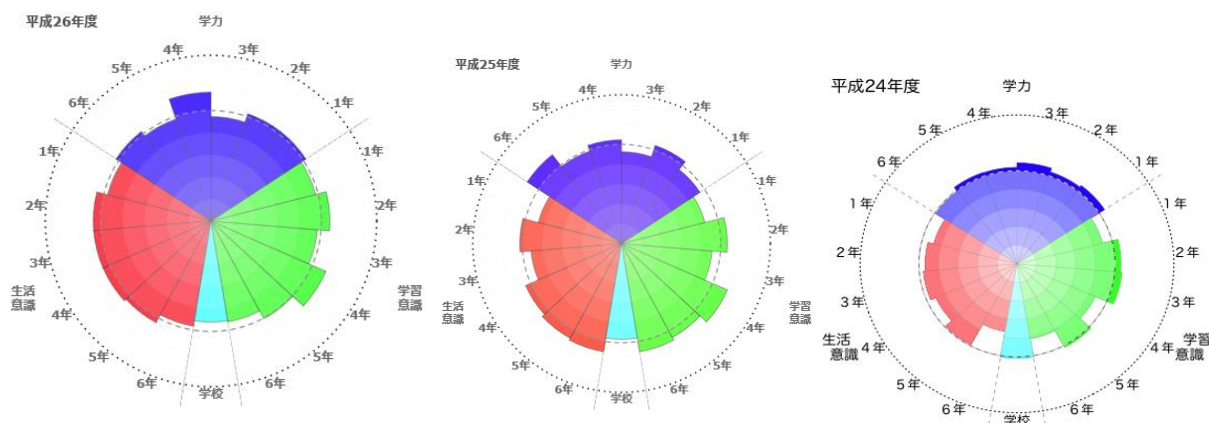
○社会科：学年によって差が見られるが、「知識・理解」の項目で課題が見られる。

○理科：学年によって、かなり差が見られる。

#### (3) 経年変化の状況と要因の分析

26年度も25年度と同様に、学年や教科によって学力差が見られる。それぞれの学年を追ってみると、必ずしもその前年から引き続いて同じような学力を維持しているというわけではない。中には、前年度より大きく学力を伸ばした学年もある。また、重点研究で算数科に3年間取り組んだ成果として、学力だけでなく、2年生以上の学年で「算数の学習が好き」という項目が市の平均よりも高くなっている。本校の本年度の学力は、全体的には、昨年度より少し高くなったと思われるが、どの学年においても、すべての教科において市の平均を上回ることを目指したい。

生活意識や学習意識については、学年によって多少差が見られるが、24年度以降、毎年全体的に向上していると言える。学力面での個人差があること、家庭での学習習慣の不十分さなどがあることを今後改善していくことにより、もっと意識を高め、学力を伸ばしていくことができると考えられる。個に応じた支援の充実をはかっていくことが必要である。



### 4. 平成27年度 目標と具体的方策

平成27年度 目標

言語活動を位置付けながら、根拠を明確にした自力解決の力を育む指導の在り方

## (1) 学校組織としての共通の取組

### ○言語活動の充実

- ・ 全教科を通じて文章の叙述や事実、資料などから自分の考えたことを根拠をもって書かせるノート、それを基にした話し合い活動を位置付けることにより、言語活動の充実を図る。
- ・ 家庭学習では技能の向上を目指す課題を繰り返し行わせ、学習の定着を図る。

### ○基礎的・基本的な知識・技能の習得

- ・ 週2回のスキルタイムの実施により、日常的に繰り返し技能の習得を行う。
- ・ 読書タイムを週1回設定し、本に親しみ、読解力を高める。

### ○研究・研修の充実

- ・ 研究授業は学年で協力して行う。指導案の作成や授業の進め方等を十分に意見交換して行うことで、経験の浅い教員もベテランとともに考え、学年の担任みんなが実践に活かせる研究とする。
- ・ 研究授業では、児童が互いのよさを認め合い、自ら学ぶ力を育むために、生活科・理科の授業提案を行う。

## (2) 学年・教科等としての取組

### 1 学年

- 身の回りの出来事や経験したこと、想像をふくらませて考えたことなどを文章に書き、書いたものを読み合い、感想を伝え合う場面を位置付ける。
- 身の回りにあるものの形を観察し、立体を構成する形状の特徴をまとめて説明するなどの場面を位置付け、立体の構成要素の素地を培う。

### 2 学年

- 主語と述語との関係に注意して書けるよう指導する。
- 登場人物の行動や会話に着目し、想像を広げながら読み、読んだ感想を伝え合う場面を多く設定する。
- 以前の学習経験をもとに、根拠を明確にして判断し、自分の考えを説明するようにさせる。
- 児童が繰り返し下がりのあるひき算が確実にできるよう、また、量感を育み、実感を伴った理解ができるように指導する。

### 3 学年

- 漢字を文の中で正しく使いながら書いたり、文章の中の大事な言葉や文を見つけたりする学習を充実させる。
- 身の回りにある数量を簡単なグラフに表したり、必要な情報を読み取ったりするなど、日常生活と関連させて問題解決にあたることができる場面を、意図的に設けていく。

### 4 学年

- 前学年までに学習した漢字やローマ字で表記されたものを正しく読むことができるよう復習する。
- 相手の話を聞いて内容を正確にとらえたり、読んだ文章の内容を要約したりする活動を充実させる。
- 問題場面と図、式を関連付けて考え、逆思考の考え方で答えを導くような場面を設ける。
- 身近な事象の観察などを、実際に体験させ、実感を伴って理解させていく。

### 5 学年

- 話し手の意図をとらえ、正確に話の内容を聞くことができるような指導を充実させる。
- 多角的に物事をとらえたり判断したりするような経験を多くもたせる。
- 以前の経験や資料などをもとにして、よく考え、自分の考えを表現する活動場面を設けていく。

### 6 学年

- 前学年までに学習した漢字の読み書きを復習し、言葉に関する活動を充実させる。
- 話し手の意図を考えながら聞き、自分の考えをまとめたり、目的に応じて自分の考えをまとめたりする。
- 資料から差異点や共通点を読み取ったり特徴を考察したりしながら、物事を関係付けて考えさせるような機会を意図的に設けていく。

### 個別支援学級

- 子どもの発達段階に応じて、各学年の取組を参考にし、必要な取組を行うようにする。
- 個別の教育支援計画・個別の指導計画に基づき、話し言葉、表情、しぐさ、書き言葉等、発達段階に応じた適切なコミュニケーション手段を積極的に活用する場面を設けるようにする。